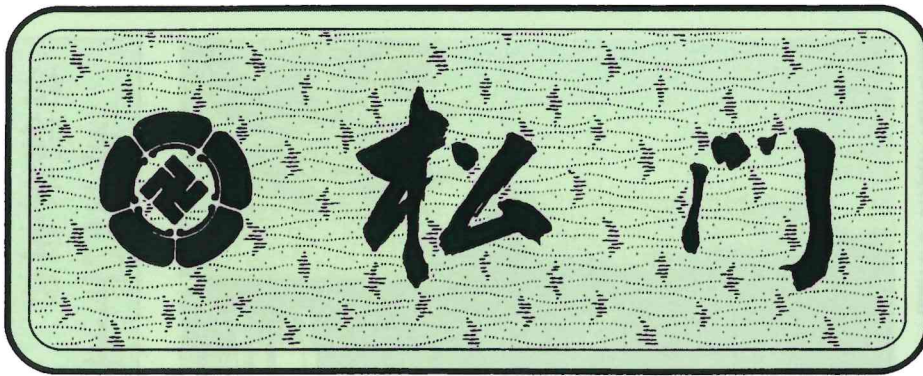




No.43
令和3年12月発行
(2021)

吉田松陰の思想と 教育の普及振興

編集発行 公益財団法人松風会
〒753-0072 山口市大手町2-18
山口県教育会館内
TEL・FAX 083-922-1218

いろいろな事情により当初の発行時期から三年以上過ぎましたが、このたび「松門」第四十三号を発行することにいたしました。また、本法人の理事長も田村洋幸に替わりましたが、前理事長の明治維新百五十年を迎えた思いを今後も大切にしていきたいと考え、原文のまま掲載いたします。

明治維新一五十年を迎えて

公益財団法人松風会 前理事長
室 謙司

「明治維新とは、十九世紀後半、日本が幕藩体制から近代天皇制へと移行する転換点となった一大変革をいう」と、また「近代天皇制の創出・形成および日本資本主義の生成・展開の出発点となった政治的、経済的、軍事的、社会的、文化的な変革の総称である」と、田中彰氏は述べておられる。(☆二)

明治維新(☆二)は、武士自らが幕府を倒し、しかも版籍奉還・廃藩置県によって、武士を辞めることによって成りたった。

松陰先生は、このような明治維新を予想し、望んでいたであろうか。

「狂夫の言」では「身分にとられず、人材を登用し、派閥の争いをなくすことが藩の存亡にかかっている」とある。「留魂録」では「尊皇攘夷のことはかりそめにもやめるべきではない。そこでいろいろ工夫し、前人のあとを受け継いで発展させていかなければならないのである」と記し、また獄中から高杉へ宛てて「諸侯が幕府を助けて、

朝廷を奉ずるように」と論している。

「対策一同」では「国家の大計という観点からいえば、その雄大な計略をもって、諸外国を制御しようとするれば、航海・通商以外に方法はあるまい。：：：そうで

なかったら、衰え、国力が長続きせず、滅亡を待つだけである」と述べている。

松陰先生は、尊皇・開国・攘夷を唱えると共に、各藩は幕府を助け天皇を中心に頂いた国づくりをすすめることを願っておられたのではないだろうか。

松陰先生が亡くなってからの九年間は、長州の存亡にかかわる激動の年であった。

松陰先生の処刑を聞いた高杉晋作は「：：承り候ところ、我が師松陰の首、遂に幕吏の手にかかり候のよし、実に、私共も子弟の交わりを結び候ほどの故、仇を報い候らはで、安心つかまつらず候。：：」(☆三)と言っている。

「留魂録」に記された遺言は門下生によって果たされた。：：激化した幕末政局において、常に局面打破の先頭を走り、明治維新への道を切り開いた長州激派、特にその中核にあって、師の思いを体し、身を捨てて闘った門下生、彼等の尊攘運動こそ松陰の望んだものであった。」という。(☆四)

松陰先生の死は門下生の倒幕心に火をつけることになったのである。それと共に門下生を初め多くの人材が犠牲となった。

古川薫氏は「安政五年松下村塾に在籍した主要な顔ぶれ三十人を並べて調べると、明治まで生き残った者は半数にしかすぎず、あとは割腹自殺八、陣殺三、討死二、斬首一、獄死一といった殉職者たちだ」(☆五)とまとめている。

明治維新の思想は、今日まで百五十年続いている。これはまた未来へつながっていく。

松陰先生及び塾生の実績は現代にも続いていることを、今改めて思い返し、未来を考えるきっかけにしたいものである。

注(☆印)

☆一『長州藩と明治維新』田中彰 著、吉川弘文館、二七三頁。

☆二 維新という言葉は「周雖旧邦、其命維新(周は旧邦なりと雖も、其の命維新なり)」『詩経』が典拠である。

☆三『吉田松陰全集』定本版、六巻四二三頁「周布政之助宛書簡」。

☆四『吉田松陰の思想』二三〇頁、本山幸彦著、不二出版。

☆五『留魂録の世界』古川薫著、山口新聞社発行

松陰先生の 主な門下生たち



維新前に逝去した門下生

赤祢武人（一八三八～一八六六）

天応九年柱島地下医の松崎家に生まれ、安政三年十九歳の時には松下村塾に学んだ。翌四年赤祢家の養子となる。松陰から伏見の獄にいる梅田雲浜の救出策を受けるが未遂に終わる。文久三年奇兵隊第三代総督となったが、慶応二年藩命により処刑。

享年二十九。

阿座上正蔵（一八四六～一八六四）

弘化三年萩藩士の家の出生、生家は杉家の北隣。安政四年十二歳で松陰の兵学門下生、塾生となり、兵学と漢学を学ぶ。安永六年松陰東送の際、送別の詩を詠む。元治元年禁門の変で自刃。享年十九。

有吉熊次郎（一八四二～一八六四）

天保十三年萩藩士の家の出生、安政五年十七歳で松下村塾に入塾。その年、間部老中要撃策に血盟。松陰投獄に抗議して謹慎となる。文久二年英国公使館を焼き、文久三年久坂玄瑞と共に八幡隊を組織した。元治元年禁門の変で自刃。享年二十三。

飯田正伯（一八二五～一八六二）

文政八年萩藩医の家の出生。安政五年三十四歳で松下村塾に入塾。村塾での銃陣訓練のリーダー。安政六年東送の松陰のため、同志と共に周旋に努め、処刑後遺骸を回向院に葬った。万延元年軍用金調達のため幕吏に捕縛され、文久二年獄死。享年三十八。

伊藤伝之輔（生没年不詳）

萩藩軽卒の家の出生。安政五年頃村塾に入塾。同年六月松陰の進言により藩命を受け、京都に出て情勢を偵察。大原卿西下策に関係して、自宅で謹慎、安政六年から万延元年

まで投獄された。慶応初年奇兵隊に入り、北越戦争に参加。

入江九一（一八三七～一八六四）

天保八年萩藩軽率の家の出生。安政五年二二歳で入塾。同年、間部老中要撃策に血盟し、松陰再獄に抗議し謹慎となる。大原卿西下策、伏見要撃策などで、松陰を支え続けた。奇兵隊創設に尽力。元治元年禁門の変で戦死。享年二十八。

大谷茂樹（一八三八～一八六五）

天応九年萩藩永代家老益田氏の家臣の家の出生。須佐育英館に学び、育英館と松下村塾の交流から、安政五年二一歳で入塾。元治元年禁門の変に関係して謹慎。慶応元年脱走し、回天軍総督となり上京を図るも、恭順派に捕らえられ切腹。享年二十八

金子重輔（重之輔）（一八三一～一八五五）

天保二年阿武郡渋木村に生まれ、金子家を継ぎ足軽となる。嘉永六年二十三歳の時、江戸の烏山新三郎の塾で松陰と出会う。安政元年松陰と共に下田踏海を決定し失敗し投獄される。安政二年岩倉獄で病死。松陰は『冤魂慰草』を編纂し、その死を悼んだ。享年二十五

許道（生没年不詳）

僧侶。安政四年九月ごろ松下村塾で学んでいた。前後の経歴は不明。久坂玄瑞（一八四〇～一八六四）

天保十一年萩藩医の家に生まれ、幼児より藩校明倫館で学ぶ。十四歳で父母・兄亡き後、家督を継ぐ。九州遊歴時に宮部鼎蔵から松陰を知り、安政四年十八歳で入塾、同年十二月松陰の妹・文と結婚。勉学に励み、松陰の教育事業を助ける。安永五年江戸、京都で尊皇攘夷活動を展開、松陰没後は塾生の指導者として遺志を継ぐ。元治元年禁門の変で自刃。享年二十五

佐々木謙蔵（一八三八～？）

天保九年萩藩士の家に生まれる。佐々木三兄弟の次男で、安政三年十九歳で松下村塾に入った。松下村塾周辺での銃陣訓練のリーダー格であった。須佐（萩市）育英館との交流に参加した。松陰処刑後は、尊皇攘夷活動のため各地を回り、奔走した。

杉山松介（一八三八～一八六四）

天保九年萩藩軽卒の家に生まれた。安政五年二十一歳で松下村塾に入る。同年六月松陰の進言により、藩命を受け、京都に出て情勢を偵察した。間部老中要撃策に血盟した。元治元年池田屋で新撰組と戦い没した。享年二十七。

瀬能百合熊（生没年不詳）

萩藩士・瀬能吉次郎の子として生まれた。父・吉次郎は松陰の父・杉百合之助と友人で、新道の杉家はも

と瀬能家の借家である。百合熊は阿座上正藏などと共に、安政四年松陰の兵学門下生及び塾生となった。

高須滝之允（一八三五―一八六六）

天保六年萩藩士の家に生まれた。安政三年松陰が出獄してからすぐに行われた幽囚室の『孟子』の講義に参加し、二十二歳で松陰の兵学門下生及び塾生となった。精鋭隊に入り国事に奔走していたが、慶応二年武器弾薬の輸送中、船から落ちて溺死した。享年三十二。

高杉晋作（一八三九―一八六七）

天保十年萩藩士の家に生まれた。幼少より藩校明倫館で学び、安政四年十九歳で松下村塾に入り、久坂玄瑞と共に村塾の双壁となった。松陰東送後は周旋に努め、処刑後は教えを忠実に実践。文久二年藩命により上海に渡り、中国の植民地化を見るや、帰国後藩論を尊皇攘夷に転換すべく尽力した。文久三年には奇兵隊を組織して恭順派を打倒し四境戦争（第二次長州征伐）で奮戦し、藩を倒幕に導いた。慶応三年病死。享年二十九。

高橋藤之進（一八四六―一八六五）

弘化三年萩藩士の家に生まれた。野山獄司・福川犀之助の弟である。安政二年十歳で獄中の松陰に教えを乞い、出獄後も指導を受けた。その

後遊撃隊の書記兼参謀となったが、慶応元年に没した。享年二十。

玉木彦介（一八四一―一八六五）

天保十二年萩藩士・玉木文之進の子として生まれた。松陰の従弟。「士規七則」は彦介のために書かれた。安政三年十六歳で幽囚室の松陰を訪れて学んだ。その後頻繁に松陰のもとに出入りしていた。元治元年御楯隊に入った。慶応元年高杉晋作等の藩論統一の戦いに参加し、絵堂の戦いで重傷を負って没する。享年二十五。

寺島忠三郎（作間忠三郎）

（一八四三―一八六四）

萩藩士の家の出生、作間家の養子になるが後に復籍。十六歳で入塾。間部老中要撃策に血盟、松陰再投獄に抗議して謹慎。文久二年松陰慰霊祭祭主。長井雅楽要撃事件、横浜公使館焼き払い事件に加わるなど国事に奔走。元治元年禁門の変で久坂玄瑞と共に自刃。

時山直八（一八三八―一八六八）

萩藩士の家の出生。初め松陰兵学門下生、二十一歳で入塾。元治元年奇兵隊に入り、参謀となる。戊辰戦争の越後朝日山（小千谷市）の戦いで戦死。

中谷正亮（一八三一―一八六二）

萩藩士の家の出生。松陰と共に江戸に遊学。安政三年時々幽囚室の松

陰を訪ねて兄事。高杉晋作や久坂玄瑞などを松陰に紹介。「一燈銭申合」に参加し活躍。文久二年藩命を受け、江戸に赴くが、病気で急逝。松陰に

「小生 大知己なり」と言わせ、「自ら妙、山口にて一世界をなせかし。天下の大事を論ずるに足らず」（松陰三十歳）と残念がらせた。

弘 勝之助（一八三七―一八六四）

萩藩士の家の出生。一八五八年入塾。七卿落ちを護衛。禁門の変で自刃。馬島甫仙（誠一郎）（一八四四―一八七二）

萩藩医の家の出生。十四歳で入塾。松陰は再投獄に当たり、「馬島に与ふ」の中で、「村塾の主持、僕、実に足下に委す。足下、果たして能く之に任ずるか」と松陰は呼びかけて、甫仙を村塾の後継者に擬している。

奇兵隊書記役。一八六五年から五年間、村塾での指導と松陰の遺稿の整理に当たった。東京で急逝。

松浦松洞（亀太郎・無窮）

（一八三七―一八六二）

魚商家の出生。幼時から絵事に秀でる。二十歳で入塾。松陰東送の際にその肖像画を描いた。その後、尊皇攘夷運動に従う。長井雅楽の公武合体論に反対し、京都栗田山で自刃。松陰（三十歳）は「無窮は吾れを知る者、豈に特だ吾が貌を写すのみならんや。」と「図賛の跋を作る」の

中で述べている。

吉田稔麿（栄太郎・秀実・無逸）

（一八四一―一八六四）

萩藩軽率の家の出生。久保氏の松下村塾で学んだ後、十六歳で増野徳民に伴われて幽囚室の松陰に入門し、最も期待された。間部老中要撃策に血盟、その後松陰の再投獄に抗議し謹慎を命じられた。そのことで、親族に迫られ松陰との交わりを絶つ。このとき、松陰は「吾が畢生の大過、何を以てこれにくわへん。無逸の心、終始一の如し、これを天地に稟け、これを父母に受く、初めより師友学問を借らざるなり。」遂に忍んで吾を棄てしなり。嗚呼、吾悔いを知る、無逸、其れ吾を恕せよ」（一八五九年「無逸に与ふ」と悔恨の情を書き送っている。その後一八六二年に活動を再開し、松陰の期待に応えた。一八六四年池田屋事件で重傷を負い、自刃。

維新後に官吏で活躍した門下生

天野御民（一八四一―一九〇二）

天保十二年萩藩士の家に生まれた。安政四年十七歳で松下村塾に入った。その後奇兵隊に入り、四境戦争で活躍した。明治以降司法官となり、獄則の起草をした。退官後は、毛利家で維新史料を編纂した。『松

下村塾零話』を著した。明治三十五年没。享年六十二。

飯田吉次郎（一八四七～一九三二）

弘化四年萩藩士の家に生まれた。安政四年十一歳で松陰の兵学門下生及び塾生になる。慶応元年奇兵隊に入り、慶応三年藩命を受けてオランダに留学した。帰国後工部省に入り鉄道建設に尽力し、京都、大津間の逢坂山トンネルを完成させた。大正二年没。享年七十七。

伊藤博文（一八四一～一九〇九）

百姓林十蔵の家に誕生。安政元年父の養子先の伊藤と改姓。安政四年十七歳で入塾。松陰の遺骸を回向院に葬る。文久三年ロンドン留学。翌年下関事件を聞き帰国。明治以降、岩倉使節団副使。初代内閣総理大臣。憲法草案起草。明治四二年ハルビン駅で暗殺された。享年六十九。

岡部繁之輔（一八四一～一九一九）

天保十三年萩藩士の家に生まれた。来原良蔵の甥で、富太郎の弟である。安政三年十五歳で松下村塾に入った。安政六年松陰東送の際、送別の詩を詠んだ。慶応三年千城隊世話役として上京した。明治以降は工部省に入った。大正八年没した。享年七十八。

岡部富太郎（一八四〇～一八九五）

天保十一年萩藩士の家に誕生。安

政四年十八歳で松下村塾に入った。須佐育英館との交流に参加。安政五年松陰再投獄に抗議し謹慎。文久元年「一燈銭申合」に参加。文久二年以降大組隊、勇力隊、千城隊で活躍。明治後諸県に在官。明治二十八年没。享年五十六。

萩野時行（一八三五～一八八四）

天保六年萩藩永代家老益田家の家臣の家に生まれ、須佐育英館で学ぶ。安政五年二十四歳で松下村塾に入り、育英館と村塾の提携に尽力。のち佐々木家養子。元治元年禁門の変で参謀。明治以降、山口明倫館、京都師範学校で教鞭をとる。明治十七年没。享年五十一。

尾寺新之丞（一八三三～一九〇二）

天保四年萩藩士の家に生まれた。嘉永六年松陰の兵学門下生。安政四年二十五歳で村塾に入った。安政六年東送された松陰のために周旋。松陰処刑後の埋葬に尽力。慶応元年奇兵隊で活躍。維新後司法省、文部省に入った。のち伊勢神宮で奉仕した。明治三十四没。享年六十九。

木戸孝允（桂小五郎）（一八三三～一八七七）

松陰の兵学門下だが、松下村塾生ではない。天保四年萩藩医の和田家に誕生。天保十一年桂家の養子。松陰の遺骸を回向院に葬る。その後奉勅攘夷に奔走し藩主から木戸姓を賜

る。薩長同盟の密約を結び明治以降要職に就く。維新三傑の一人。明治十年病死。享年四十五。

木梨平之進（一八四〇～一九〇〇）

天保十一年萩藩士の家に生まれ、安政五年十九歳で松下村塾に入る。明治三年から翌四年まで伊藤博文等と共に渡米し、財政を研究した。

帰国後、士族授産事業の一環として計画された第一百国立銀行（現山口銀行）の創立に携わった。後に第三代頭取を務め、在職中明治三十年に没した。享年六十一。

河北義次郎（一八四三～一八九〇）

天保十四年萩藩士の家に生まれた。安政五年十六歳で松下村塾に入った。同年松陰は「河北生を示す」を詩作し励ましている。慶応三年藩命で米国・英国に留学した。明治以降は軍人、外交官として活躍した。明治二十三年赴任先のソウルで没した。享年四十五。

国司仙吉（一八六四～一九一五）

弘化三年萩藩士の家に生まれた。安政四年十二歳で松陰の兵学門下生となり、次いで松下村塾で学んだ。明治以降秋田県令になった。大正三年に没す。享年七十。

久保清太郎（一八三二～一八七八）

天保三年萩藩士の家に生まれた。久保家は松陰の養母久満の養家で、

清太郎は嘉永元年十七歳で松陰の兵学門下生となる。安政二年江戸在中、松陰の旧友と交流し、松陰のために種々の便を図った。安政四年帰国し、松陰主宰の松下村塾実現に努力、自らも指導に当たった。維新後は、三重県令などを努めた。明治十一年没。享年四十七。

倉橋直之輔（一八四〇～？）

天保十一年萩藩軽卒の家に生まれた。安政三年十七歳で幽囚室の松陰の門下生となった。安政五年野山獄に運ばれる松陰駕籠に付き従ったが、その後塾との交流が途絶えた。明治以降は官職に就いた。

黒瀬真市郎（一八三〇～一九〇八）

天保元年萩藩士の家に生まれた。安政五年二十九歳で松下村塾に入る。その後奇兵隊等に入り、国事に奔走した。明治以降は中関村（防府市）村会議員を務めるなど、地方の有力者として活躍した。明治四十一年に没した。享年七十九。

河内紀令（？～一八七二）

萩藩士の堅田家老の家に生まれた。安政五年松下村塾に入った。その際、青年二十六人を引き入れて銃陣の練習を請うた代表である。間部老中要撃策に血盟した。松陰再投獄の後、元治元年河内は隠居を命じられた。明治四年没した。

溝三郎（一八四四～？）

弘化元年萩藩商家の家に生まれた。吉田稔麿に伴われて松下村塾に来了。「無頼」の三少年の一人、松陰はしいて拒絶せず、安政四年十四歳で入塾した。

駒井政五郎（一八四一～一八六九）

天保十二年萩藩士の家に生まれた。安政四年十七歳で松陰の兵学門下生となり、松下村塾で学ぶ。元治元年二十四歳で八幡隊の隊長となり、後御楯隊の隊長となって、四境戦争（第二次長州征伐）で活躍した。明治二年北海道で榎本軍と戦い、二股金山において戦死。享年二十九。

境二郎（一八三六～一九〇〇）

天保七年萩藩士の斎藤家に生まれ、後に境家の養子となった。嘉永三年十五歳で松陰の兵学門下生となり、安政四年二十二歳で松下村塾に学んだ。慶応元年萩藩尊攘事跡の編集局員となる。維新後に島根県令を努めた。晩年、松下村塾の保存の必要性を痛感して保存会を設立し、塾舎を補修した。明治三十三年没。享年六十五。

佐々木梅三郎（一八四〇～？）

天保十一年萩藩士の家に生まれた。佐々木三兄弟（謙藏、亀之助、梅三郎）の三男で、松陰が安政元年九月から萩の野山獄に囚獄生活となっ

ていたが、安政二年十六歳で幽囚室の松陰門下生となった。須佐（萩市）育英館との交流に参加した。明治二十一年頃北海道に移住した。

佐々木亀之助（一八三五～一九一四）

天保六年萩藩士の家に生まれた。佐々木三兄弟の長男で嘉永元年十四歳にして、松陰の兵学門下生となった。須佐（萩市）育英館との交流に参加した。文久三年義勇隊、元治元年南園隊を率いて、国事に尽くした。明治二十一年頃、北海道に移住した。享年八十。

品川弥二郎（一八四三～一九〇〇）

天保十四年萩藩軽卒の家に生まれた。安政四年十五歳で松下村塾に入る。翌五年間部老中要撃策に血盟し、松陰再投獄には抗議して家囚となる。松陰没後は国事に奔走した。明治三年から八年までイギリス、ドイツに滞在した後、内務大臣等明治政府の要職を歴任し、信用組合の普及に努め、尊攘堂の建立（京都高倉など、松陰の精神を広く知らしめることに尽力した。明治三十三年没。享年五十八。

滝弥太郎（一八四二～一九〇六）

天保十三年萩藩士の家に生まれた。安政五年十六歳で松下村塾に入った。文久二年「攘夷血盟」に加わり、翌三年高杉晋作の後を受けて、河上弥

一と共に奇兵隊総督となった。維新後は岡山地方裁判所長となった。明治三十九年没。享年六十五。

竹下琢磨（一八三一～？）

天保二年萩藩士堅田家の家臣の家に生まれた。河内紀令に連れられて安政五年二十八歳の時、松下村塾で銃創訓練をした。その後十数日寄宿して松陰に学んだ。慶応三年長崎へ西洋兵術を学ぶために派遣されたが、軍務には就いていない。明治六年都濃郡第三十三小学区戸田小学が設立され、初代校長に就いた。

野村 靖（和作）（一八四二～一九〇九）

萩藩軽率の家の出生。十六歳で入塾。安政六年、伏見要撃策に失敗し、兄の入江九一と岩倉獄に入獄。万延元年釈放され、尊皇攘夷運動に奔走。明治四〇六年、岩倉使節団に随行して欧米諸国を視察。その後、神奈川県令、内務大臣、通信大臣等要職を歴任。松陰の顕彰にも尽くした。明治四十二年死去。松陰から「和作は年少心元なく候へども亦鋭果（鋭敏果敢）、愛すべき者に候」（松陰二十九歳）と評されている。

福原又四郎（利実・去華）

（一八四一～一九一〇）

萩藩士家の出生。来原良蔵の甥。十八歳で入塾。間部老中要撃策に血盟。松陰東送後は久坂玄瑞に受指導。

長井雅楽と親戚のため長井切腹の介錯をした。北越戦争に干城隊参謀として従軍。維新後は裁判所に勤務。「又四の人物は沈重簡黙、自ら能く華を去り実に就く者」と名前選定（去華）の理由を松陰（三十歳）は記している。前原一誠（佐世八十郎・彦太郎）

（一八三四～一八七六）

萩藩士の家の出生。二十三歳で入塾。間部老中要撃策に血盟。長崎遊学後、藩の西洋学問所に在学。七卿御用掛。四境戦争では小倉藩との折衝に当たる。一八六九年越後府判事、同年参議・兵部大輔となり軍政の確立に尽力するも政府と意見不一致。翌年帰萩。維新政府に対する不満などから、一八七六年十月奥平謙輔等と萩に挙兵、県庁を襲って中央に出ようとしたが政府軍に平定され、萩で処刑された（萩の乱）。「八十は勇あり智あり、誠実人に過ぐ」また「佐世が相替らず誠実の武士」と松陰（三十歳）は評している。

正木退蔵（一八四六～一八九六）

萩藩士の家の出生。十三歳で入塾。恭順派排撃運動に参加。一八七一年英国留学、一旦帰国し一八七六年英国再留学し、文豪ステイブソンに松陰の事蹟を語ったところ、『吉田寅次郎』を著す。一八八一年帰国後、東京職工学校長、さらに外務省入省。一八九一

年ハワイ総領事。二年後官界を退く。

松本 鼎(提山) (一八三九～一九〇七)

農家の出生。幼くして仏道に入門。十九歳で入塾。松陰再投獄に際し、野山獄まで見送る。その後還俗し、禁門の変・四境戦争に従軍。維新後は和歌山県令などを歴任し、元老院議員・貴族院議員。

山縣有朋(小助・狂介)

(一八三八～一九二二)

萩藩軽率の家の出生。藩命により伊藤博文等と京都の情勢を偵察。久坂玄瑞の紹介により、二十一歳で入塾。一八六五年、奇兵隊軍監となる。戊辰戦争では越後・会津方面で参謀として活躍。維新後、欧州の兵制を視察し、日本近代軍政の基礎を築く。明治二十二年総理大臣。明治大正期に元老として権勢を奮った。

山田顕義(市之允) (一八四四～一八九二)

萩藩士の家の出生。十五歳で入塾。禁門の変・戊辰戦争等を戦う。一八七二年、岩倉使節団に随行して欧米諸国を視察。一八七十八年、西南戦争に参加し、陸軍中將。一八八六年、司法大臣。なお、日本大学及び國學院大學の創立者。

横山重五郎(幾太) (一八四一～一九〇六)

萩藩士の家の出生。十七歳で入塾。後に志士を自宅に集め、勉強会を開き、松陰に喜ばれる。維新後は教師

や大津郡郡長等を務めた。

維新後に民間で活躍した門下生

大賀春哉 (一八二七～一八八四)

文久十年酒屋の家に生まれた。安政四年三十一歳で松下村塾に入った。安政五年松陰から情報収集を託され、岩国に赴いた。元治元年奇兵隊に入り、国事に奔走した。維新後は大阪で鎮台御用商人となった。明治十七年没した。享年五十八。

岡仙吉 (生没年不詳)

萩藩軽卒の家に生まれた。安政五年松下村塾に入り、藩命を受けて京都で情勢を探った。入江九一と親しく、投獄された入江らの便宜を図った。文久三年京都で活躍し、慶応の頃は奇兵隊にいた。明治二十二年松陰の贈位を祝う歌を作る。その後のことは不明である。

小野為八 (一八二九～一九〇七)

萩藩御雇医の家に誕生。天保十五年松陰の兵学門下。長崎で洋式砲術や写真術を学び、安政五年三十歳で松下村塾生。地雷火を製造し間部老中要撃策に血盟したとされる。のち奇兵隊砲隊長。明治二十二年神道黒住教教導職。明治四十年没。享年七十九。

観界 (一八四三～一九二五)

天保十四年農民の家に生まれた。安政五年十六歳の時、松下村塾に入っ

た。文久三年岩国の正蓮寺に入り、翌元治元年同寺の十三世住職となった。四境戦争の際は、周辺寺院と協力して大砲隊を組織して活躍した。大正十四年没した。享年八十四。

富樫文周 (一八四一～一八八七)

芸州の医師の家の出生。十八歳で入塾。六か月間在塾。唯一の藩外塾生。医師としての道を歩み、晩年は萩市に移り住んだ。

中谷茂十郎 (一八三九?)

萩藩士の家の出生。中谷正亮の甥。二十歳時、塾で学ぶ。維新後明倫館で兵学を教授。

福川犀之助 (一八三四～一八八五)

萩藩士の家の出生。安政元年松陰の野山獄入獄時の司獄の役人。松陰を尊敬し、弟子となる。野山獄で松陰が教育行為ができたのは犀之助の計らいによる。そして「福堂策」が発案される。松陰江戸東送の前夜、犀之助は独断で杉家に帰らせたが、そのことで職務遠慮を申しつけられた。一八七三年ごろまで塾を開いていた。松陰(二十六歳)は「獄司福川氏余に従ひて業を請ふ。余其の懇篤を愛し、傾倒して遺すことなし」と書き残す。

増野徳民(無咎) (一八四二～一八七七)

山代(岩国市本郷)の地下医家の出生。十六歳で入塾、寄宿生、松陰の身の回りの世話などを担当。最も

長く松陰に師事。三年ほどで村塾を去り、しばらく音信不通。文久二年

久坂玄瑞に再会し、国事に奔走するも、実家に連れ戻される。維新後は郷里で一医師として生涯を終えた。「徳民は縝密にして書を読み、精苦人に絶す」と松陰(二十八歳)は評し、「無咎足下、飄然たる山代の一医生、乃ち来りて吾が社に入り、王事を周旋す、始終一節、奇男子なるかな」と松陰(三十歳)は記す。

馬島春海 (一八四一～一九〇五)

大野毛利家の医家に出生。十七歳入塾。一八六三～四年の間、萩で晩成堂(塾)を開設。後上京。

山根孝仲 (一八三三～一八九八)

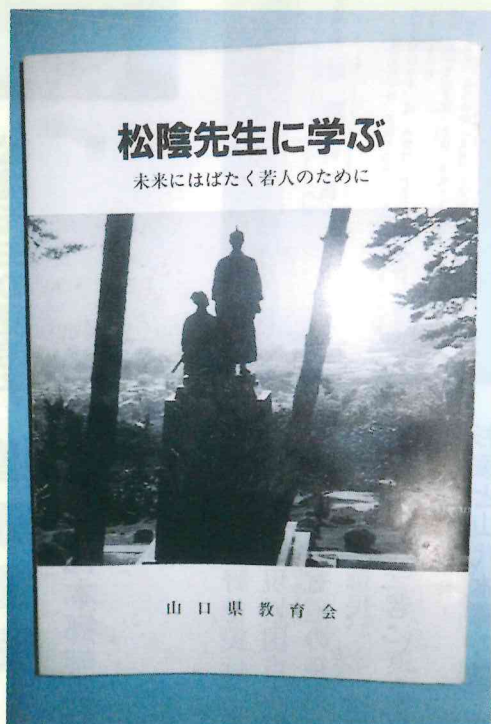
医家の出生。藩医・山根文季の養子。三十六歳の入塾で最年長塾生。会津攻略戦で敵・味方の別なく治療。後に萩で眼科医を開き、高評判

渡辺蒿蔵(天野清三郎)

(一八四三～一九三九)

萩藩士の家の出生。天野家の養子となるが、後に渡辺家に復す。十五歳で入塾。奇兵隊創設に関わるも、一八六七年英国に留学し造船技術を研究。帰国後、長崎造船所を設立、日本近代造船界に貢献。晩年は、松下村塾生最後の生存者として松陰の思い出を語り伝え、九十六歳で没した。

シリーズ 松陰先生に学ぶ



松陰先生と私

防府市教員委員会生涯学習課

人権学習指導員 水野 昭

昭

松陰先生との出会いは、今から三十年以上も前にさかのぼる。当時、防府市立中関小学校に勤務していた私は、元中関小学校長 小川善博先生から防府松陰研究会への入会を勧められ加入した。月に一、二回程度の輪読会が行われていた。当時の講師は、故河村太市先生。先生の博識と人生観に触れ、魂が揺り動かされたのを覚えている。

平成二年度、山口県教育会からの委託を受け、『松陰先生に学ぶ』編集の機会を得た。その時の委員長は、現在、松風会の理事長をされている室謙司先生、委員は九名、この十名で、十章を分担し執筆していった。私の担当は、「四 純粋な人 松陰」。今回、寄稿の機会を得、この章を読み直してみた。

以下、本文からの引用。脱藩の罪により、杉家に預けられていた松陰は、藩主の計らいで、嘉永六年（一八五三年）一月二十六日の早朝、十カ年の諸国遊学の旅に出ました。二月十日、大阪に着いて、近畿地方を遍歴し、多くの学者や志士を訪問しました。中でも、大和五条の森田節齋は、松陰の人物を見込んで、兵学などやめて、漢文学をやるようにと勧めました。松陰は、文学的な面にも非常に素質のある人で、やればできる人でしたから、文学を修めるのに精力を注ごうか、あるいは文学をやめてもっぱら兵学を学ぼうかという迷ったようです。しかし、断然一決して「江戸に向かい、兵学を修めよう。」と中仙道を通って江戸に入りました。十一歳のとき、藩主の前で兵学の講義をみごとにやり遂げ、将来を期待されていた松陰だけに兵学を捨てることはできませんでした。それは、松陰だけのためではなく、藩主を裏切ってはならないと心の奥で叫ぶものがあつたからです。（引用終わり）

私はこの一文を読み返し、もしも、松陰先生が漢文学の道に進んでおられたなら、また、松陰先生の人生は変わったものになっていたかもしれないと思いました。純粋さと誠実さ。不易の部分として、大切にしていきたい人の特性である。





松陰先生の愛弟子

増野徳民

山代本郷歴史研究会

会長 池田 良幸



誕生地 増野徳民は、天保十二年（一八四一）山代本郷村（現岩国市本郷町）の萩毛利藩山代勘場医、増野寛道の長男として生まれる。名は乾のちに晋（徳民、字は徳民または無咎といった。また、山代三老に連なる家系の一人である。

杉家と山代本郷の縁 青雲の志に燃える十五歳の徳民は、安政三年（一八五六）萩、松本村の藩士杉百合助の家に寄宿し、松陰先生に師事する。（杉家は、山代本郷の代官杉民治宅、松陰の実家で松陰と同居）（玉木文之進も本郷勘場の代官を勤めている）松下村塾に入った徳民は、人一倍の努力家で松陰は期待して無咎の字をあたえる。

吉田榮太郎（無逸）、松浦松洞（無窮）と共に三無生の一人として松下村塾の基礎を築いた。寄宿生の徳民は、毎朝松陰の髪を結い身のまわりの世話をした。最も長く最も身近で松陰の教えを受けた一人である。

攘夷運動で活躍 松陰入獄後は、藩医岡田以伯に学びつつ、松陰の命を受けて品川弥二郎らと奔走する。安政の大獄に連座した松陰は、江戸に送ら

れることとなる。師を見送る徳民に「国を治療するような医者になれ」と励ました。

故郷に送還される 松陰刑死後も、徳民はその志を継ぎ、同志久坂玄瑞らと共に、藩論を公武合体から尊皇攘夷に転換させた。しかし、そうした過激な言動がたり、徳民（二十二歳）は文久二年（一八六二）藩の役人に捕らえられて山代本郷に送還され、厳しい監視下の身となり、萩における七年間の活動もここに終えることとなる。

四境戦争 慶応二年（一八六六）に始まった「四境の役」（第二次長州征討）に総動員された山代の医師二十名の中に、山代勘場医、増野寛道（父）増野晋齋（徳民）の名前がある。明治二年「寅年芸州口戦争之砲銃創人治療・・・」を賞され、藩主より金十両を下賜されている。

病没 時局は、動乱をきわめる中、かつての同志たちの死を聞くたびに、徳民の心は痛み、決して楽しまなかったという。明治十年（一八七七）徳民は多くの果たせぬ志を残したまま、三十七歳の若さで吐血し病没する。歴史にもしほはないだろうが、もし謹慎の身でなかったなら、もし肺の病でなかったなら、萩で京で、明治新政府で、松陰先生の遺志を継ぎ、同志と共に活躍出来たのに・・・

癸丑遊歴日録

松陰ゆかりの地巡検概略

岸和田・熊取・富田林・五條・樺原

十月二十八日から三十日(月) 風の影響による雨の中、松陰ゆかりの地を訪ねた。

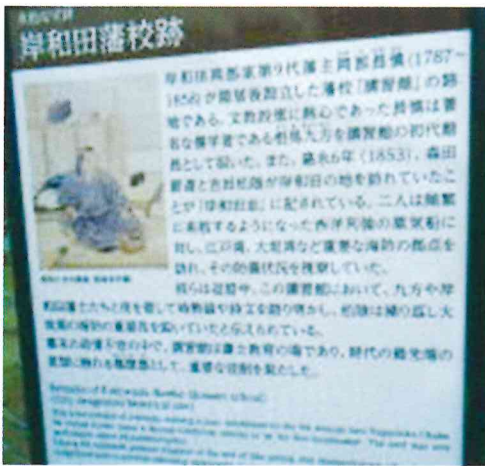
岸和田藩校講習館(岸和田)

「二十三日……夜、相馬一郎を訪ふ、名は肇、字は元基。帰りし時は已に丑なり……」

嘉永六年(一八五三) 二月二十三日、松陰は岸和田城下の藩校講習館に相馬九方(二郎)を訪ねた。

以後九日間出入りした講習館は、現在、保育所となっており、遺構は全く残っていない。

講習館の一室で囲炉裏を囲み、茶を飲み、せんべいをかじりながら、夜を徹して時勢について熱く語り合ったという往時を偲ぶには寂しい変わりようである。



保育所前

中家住宅(熊取)

相馬九方(一八二〇～一八七九) 漢学者。讃岐高松に生まれる。徂徠学を学び、京都で学び、京都で学問修業を重ねる。

嘉永四年(一八五二)年、和泉岸和田藩主岡部長慎(ながちか)に招かれ、藩校講習館教授となる。通称は一郎、名は肇、字は元基。



中家表門

「三月三日 岸和田を発し、熊取の中左近の家に至る、二里。医生左海祐齋数々来る。」

熊取町生涯学習推進課の古市氏による説明を受けながら見学した。

松陰は三月三日、四日の二日間滞

在した。中家は平安時代、後白河法皇が熊野行幸の時に立ち寄り、行宮(仮設の御所)として由緒ある泉南地方の旧家である。「中」の姓名は、前九年の役(一五〇一～六二)に源頼義と共に奥州へ下向した高瀬清原武盛の跡を継いだ嫡男盛晴が、中と改めたことに始まり、盛晴の嫡男盛秀は左近将監に任じられ、中家は代々「左近」を名乗った。

中家住宅の南に面する大きな表門(三間葉医門)を入ると、正面に豪快な土間を持つ主屋(母屋)が妻面をみせて建っている。主屋は入母屋造り・萱葺き・妻入りで、周囲に本瓦葺きの庇を持つ土塀をめぐらしている。かつては、主屋の東側には別棟の式台玄関のつく客殿(書院)があり、松陰はここに泊まったと思われるが、今は失われてない。主屋の造りは岸和田藩の郷土代官や七人庄屋の筆頭を務めた中家のかつての繁栄ぶりを雄弁に物語っている。

佐渡屋仲村家(富田林)

薄暗くなる中、佐渡屋仲村家を訪ねた。現在も使われており、中を見学することは出来ない。

「十四日 晴。節節齋に従ひて錦部郡富田林の仲村徳兵衛の家に至る。」



仲村家は土地を代表する酒蔵家で、幾棟もの酒蔵を列ねる大きな家屋敷を有していたが、その後、多くは失われた。しかし、往時の面影は今も残っている。

松陰は二月十四日から二十二日までの九日間、三月十八日から二十九日までの十二日間、計二十一日間滞在している。

森田節齊旧宅跡（五條）

天誅組記念館の内倉氏の案内で雨の中、森田節齊旧宅、堤孝亭宅、頌徳碑を訪ねた。

「十三日 雨。……森田謙藏を訪ふ。謙藏、名は益、節齊と号し、江

幡五郎も師なり。……後乃ち達し、為に五郎の事を語り、又其の文を論ずるを聴きて夜半に至る。快し。遂に宿す……」

二月十三日、「五條が生んだ儒学者で、明治維新の思想的指導者」といわれた森田節齊を訪ねている。旧宅はすでに無く、「森田節齊宅址」の小さな案内板があるのみである。

節齊旧宅から百メートル離れた所に堤孝亭の家がある。今は書店となっている。松陰は堤宅に寄宿し節齊の許へ毎日通っている。



森田節齊宅跡

谷三山旧宅跡（檀原）

木村氏の案内で谷三山旧宅を訪ねた。

「これまで吉田松陰と谷三山で案内を依頼されたことは皆無である」と話され、檀原は古代歴史の町と実感させられた。

激しくなる雨の中、谷三山宅をめざした。途中、八木辻の交流館を訪

れ、しばし休憩。旅籠として使われていた建物で、往時の様子を十分に偲ばせてくれる。

興讓館のあった三山の旧宅は、八木辻からさほど遠くない八木町三丁目に現存し、建坪六百坪といわれる豪壮な家構えである。今の当主谷孫兵衛氏の家、もと興讓館に松陰に関する資料は何も残されていない。

松陰は四月五日、五月二日の二回興讓館を訪れている。「四月五日雨。八木に至る。行程五十町。谷三山翁に謁す」「五月二日 雨已にして晴る。吉太郎を伴ひ、田井庄を発して八木に至り、三山翁を訪ふ」親



谷三山木像（谷家蔵）

しく学んだのは、この二回にすぎない。若くして聴力を失った聾者の三山とは、全て筆談であったが、「谷三山は天下の奇人と謂ふべし」「昌平（三山）の学逢ふ毎に之れを奇とす」などというように、その都度、三山の学識や人と為りに強い感銘を受けている。松陰は上方をめざす塾生に対して大和八木へ立ち寄り、三山に学ぶように盛んに勧めている。谷三山の影響は、松下村塾の教育にも及んでいる。





松陰読本・手引き書

吉田松陰の生涯と業績

(頒布価格 一、〇〇〇円 平成二十九年一月三十一日 発行)

本書の構成

- 第一章 松陰の幼年時代
- 第二章 御前講義
- 第三章 松陰の修業
- 第四章 海外渡航の失敗
- 第五章 野山獄
- 第六章 幽囚室
- 第七章 松下村塾
- 第八章 なみだ松
- 第九章 松陰の最期



松陰読本とは

郷土の偉人吉田松陰の生涯とその業績を後世に伝え、現在に生かすように、明倫小学校の「松陰読本」を原型にして昭和五十五年に萩市が編纂し直した。

松陰読本の指導について

教科の場合、指導書というも

松陰読本・手引き書の構成

そこで、どこの場合でどんな資料があれば適切な指導が出来るかを考え、『松陰読本』の編集方針に準じ、第一章から第九章までに必要な資料を収集し、注釈や解説等を交え、『松陰読本・手引き書』を作成することにした。

松陰読本・手引き書の活用について

三十歳の若さで処刑された吉田松陰の生涯と業績について、わかりやすく書いたのがこの手引き書である。この手引き書を活用することによって次のようなことが考えられる。

一、公務繁多でゆとりの少ない先生方が、「松陰読本」の内容を子ども達に指導する場合、事前にこの手引き書を一読すれば正しく指導できる。

二、学校で学んだ子ども達が、家庭で松陰の話をする場合、保護者の方が手引き書を一読すれば、その話の補足や誤りの是正が出来る、楽しい団欒となる。

三、萩市には松陰に関わる史跡があり、ガイドが現在活躍しているが、ガイドの方々が手引き書を活用することによって観光客に松陰の生き様を正しく伝えることが出来る。

四、教師や保護者から話を聞いた子どもたちが、吉田松陰を誇りに思うと同時に、自分の生活を見直し、将来に対し希望や志を持つようになる。

五、幕末から明治にかけて活躍した人材を育てたのが吉田松陰である。多くの人々が松陰の人間性や志、門下生に対する指導の在り方等をこの手引き書で学んでほしい。

執筆者・公益財団法人松風会

理事 弘長 純忠



研修会の紹介

1 「松陰研修塾（特別編）」（参加費：無料）

○日時 令和4年2月26日（土） 13:00～16:00

○会場 山口県教育会館 第4研修室（3階）

○講座 2講座を予定しています。（講座名及び講師、参加申込等につきましては、決まりしだい松風会ホームページに掲載します。）

2 令和4年度開設予定「第14回 松陰研修塾基礎コース」（参加費：2,000円）

1年次（令和4年度）

第1回 6月25日（土）10:00～16:00
山口県教育会館

松陰の幼少時代（杉家のこと）

御前講義

松陰教学に学ぶ（座談会）

第2回 8月27日（土）10:00～16:00
山口県教育会館

九州遊歴

第1回江戸遊学

楠公墓下詩（漢詩）・先考の十七忌辰の詩

第3回 10月29日（土）10:00～16:00
山口県教育会館

東北遊歴

第2回江戸遊学（米艦来航まで）

下田踏海（ペリーの日本遠征記）

第4回 1月28日（土）10:00～16:00
山口県教育会館

江戸獄入獄から野山獄護送まで

野山獄入獄（松陰の教化活動）

福堂説（上・下）七生説

2年次（令和5年度）

第1回 6月24日（土）10:00～16:00
山口県教育会館

松陰と家庭教育

松陰の手紙

至誠館に伝わる資料

第2回 8月26日（土）10:00～16:00
山口県教育会館

幽囚室（野山獄囚出獄援助）

松下村塾の教育

松下村塾の寄宿生として初めての増野徳民

第3回 10月28日（土）～30（月）
東京都（松陰神社 他）

現地研修

江戸における松陰の足跡を訪ねる

第4回 1月27日（土）10:00～16:00
山口県教育会館

野山獄再入獄と厳囚紀事

松陰の最後

座談会（松陰教学を学んで）

参加申込はメール、ファックス、電話で下記松風会事務局までお申し込みください。

3 吉田松陰撰集輪読会（参加費：無料）

○日時 毎月第2土曜日 14:00～16:00

○会場 山口県教育会館

・事前申込の必要はありません。どなたでも自由に参加できます。

申込先

〒753-0072

山口市大手町2-18 山口県教育会館内 公益財団法人松風会

TEL.FAX. 083-922-1218

mail shohukai@gold.ocn.ne.jp